

新技術で課題解決に取り組む「宇宙のまち」

鹿児島県南種子町

本誌編集部 石川 新

南種子町は、種子島の南部に位置する面積一〇九・九四平方キロメートル、人口四九三三人（二〇二六年三月末現在）が暮らす自治体だ。一九六九年に「種子島宇宙センタ―」が設立されたことを機に、町としても宇宙を活かしたまちづくりを推進しており、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の協力のもと、宇宙やロケットについて学べる小中学生を対象とした「離島留学プログラム」などを展開している。

本稿では、近年、町が取り組んでいる施策および、国の「特定有人国境離島地域社会維持推進交付金（以下、有人国境離島交付金）」の活用事

例を紹介する（現状は二〇二六年四月の取材時）。

町の経済活性化に向けた

電子地域通貨「あば!Pay」

全国で急速にキャッシュレス決済が普及しており、経済産業省によれば二〇二五年の同決済比率は五八パーセントにまで達している。この状況に先んじ、南種子町では、電子決済を通じた地域経済の循環を目指し、電子地域通貨「あば!Pay」を二三年に導入した（「あば!」とは種子島の方言で「驚いた!」の意）。

利用者は、QRコードが印刷されたカードまたは、スマートフォン



「観光あば!Payカード」。

アプリに、町内の加盟店で現金をチャージして使用する。利用者には、チャージ額の一パーセント分の金額が上乘せされる特典がある。参加する町内事業者は、当初五〇社ほどだ

ったが、現在は約八〇社まで増加している。運営は町が行ない、加盟事業者からの手数料を運営費と上乗せチャージ分に充てている。

二〇二五年からは「観光あば！Pay」として、町外ならびに島外の方も利用することが可能となった。役場や一部加盟店でカードが配布されているほか、あらかじめ一定額がチャージされたカードが、ふるさと納税の返礼品となっている。

町では全住民に対し「あば！Pay」を登録、支給しており、国の物価高騰対策などの給付金事業を行なう際に、現金や紙の商品券ではなく、あば！Payのポイントとして給付すること、迅速な支給につなげている。また、使用期限を設けることで、貯金ではなく、町内の経済活性化に確実につなげるのめねらいの一つだ。導入から二年半が経過し、住民へも着実に浸透している。

利用者のニーズに応える 地域交通「のるーと南種子」

地域交通の課題解決を目指して、二〇二五年に導入したのがＡＩデマンド交通「のるーと南種子」だ。町では従来、定期路線バスが五路線運行していたが、スクールバスも兼ねるなど、運行時間に制約があった。また、バスは路線ごとに一台しかなく、一路線の運行に四〇分～一時間程度を要する。利便性の悪さから、利用者が低迷し、いわゆる「空気



「のるーと南種子」の使用車両には、予約やルートを示すタブレットが備えられている。

を運ぶ」ような状況も見られていた。そこで、バスを代替するとともに、利用者のニーズにも応える交通手段として「デマンド交通」を始めた。四月から半年間の実証運行を経て、一〇月より本格稼働している。

利用者は、ウェブサイトや電話、町役場ほか公共施設に設置された専用タブレットから乗降場所や時間を入力して予約する。「町内便」は町内全域を運行エリアとし、利用者は自宅からスーパー、病院などの目的地へ「ドア・トゥ・ドア」での移動が可能となる。効率的な運行に向け、複数の予約がある場合は、ＡＩが最適なルートを構築している。利用状況などにも左右されるが、現在、通常時は予約から一〇分程度で乗車できるといふ。二六年二月までに六〇〇人近い利用があり、うち半数が七〇代以上と、交通弱者支援につながっている。

このほか、中種子町の種子島空港と南種子町を結ぶ「空港便」も飛行機の発着に合わせて一日五便運行されている。こちらは乗車場所や時間が固定されている点で従来の定期路線バスの運用に近く、前日までに予約する必要がある。なお、空港から南種子町へ向かう際は、二〇地点から降車場所を選択できる。

スマート農業と有機農業の実践

南種子町では、農業従事者の高齢化や後継者不足などの課題に直面している。この状況の改善に向け、町が推進しているのがスマート農業と有機農業である。

スマート農業では、国の「デジタル田園都市国家構想交付金」を活用し、「e-kakashi(イーカカシ)」という、温度・湿度・土壌水分などの環境データを圃場に設置したセンサー

で収集し、分析する仕組みを整備している。ベテラン農家が長年の経験で行なっていた栽培技術を可視化し、農家全体で栽培の改善点や適切な作業タイミングを把握しやすくすることがねらいだ。ハウス内の二酸化炭素濃度不足が原因でマンゴーの生育が不良となっていた農園で、換気方法の改善により収量向上につながった事例など、成果も出始めている。

また、水稲の除草を自動で行なう「アイガモロボット」を導入し、除草剤を使用せずに、農家の負担を軽減する試みもなされている。

化学肥料および農薬などを使用しない有機農業については、町と有限会社かごしま有機生産組合ほか関係機関によって、二〇二二年に発足した「南種子町有機農業推進協議会」を中心に新規就農支援や、生産指導などを実施している。特徴的なのが学校給食に対する取り組みで、有機



有機農業の生産品は、町の直売所でも購入できる。

栽培したニンジンやジャガイモ、米などを給食センターや保育園に提供している。食育に関連しても、町では二〇二六年一月から、町内で生産され、島外で肥育された和牛「黒毛姫牛」を月に数回、給食の食材として提供を始めている。これら、食育や地産地消の充実は、地元住民に留まらず、離島留学生の保護者などにも喜ばれている。

特産品を生かしたイタリアンジェラート

南種子町に二〇一一年に移住した風間辰広さんが経営する「株式会社



株式会社HOPEの風間辰広さん。



種子島の特産品を使った
イタリアンジェラート。

HOPE」。現在、宿泊業を中心に、脱毛エステやサーフボードなどのレンタル、コワーキングスペースの運営など、多角的に事業に取り組んでいる。このうち、有人国境離島交付金を活用して、一八年に開業したのがイタリアンジェラートショップだ。きっかけは、地元の農家との交流で、生果で消費しきれないポンカン、タンカンを加工品にできないかと考えた際に、ジェラートへの加工を思いついたという。冷凍設備など製造機器の整備に交付金を活用し、三人を

新たに雇用した。

地元の農産品の有効利用からスタートしたジェラートショップは、門倉岬近くで天日乾燥により作られる塩「七つの海」や、オーガニックにこだわる田上製茶の抹茶など町内の特産品をはじめ、安納芋、牛乳、黒糖など島内の産品を最大限に活用している。国内各地のイベントや百貨店の催事への出店など、販路拡大にも注力しており、JR九州のクルーズトレイン「ななつ星in九州」のデザートにも採用された。また、高い品質が評価され、シンガポールなど海外への輸出も実現している。

「都会ではなくて、島だからこそ事業を成功させるチャンスがあったと思います。私自身も種子島の風景が好きですし、子どもにとっては故郷ですから、将来戻って来られる場所として残せるよう、地域を盛り上げていきたいです」



南種子町では、二〇二四年に「SPACE TOWN 南種子」として改めて「宇宙のまち」を宣言した。この時の小園裕康町長の「南種子町は新しいものを受け入れ、育み、広げていく力を持っています」という言葉は、まさに今回取り上げた新技術の活用に対する町の積極性を裏づけている。地域経済の活性化、交通弱者の利便性向上、持続可能な農業の展開など、目的を明確にし、その実現に向け意欲的に新しい取り組みに挑戦しているのが印象的であり、今後の展開がますます楽しみである。

